

「離縁について」

2022年03月17日

「しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とお造りになった。こういうわけで、人は父母を離れて妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、もはや二人ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」(マルコ福音書 10 章 6 節～9 節)

主イエスはヨルダン川の向こう側へ行かれたが、群衆がまた集まって来たので、いつものように教えられた。そこへ、主イエスを試そうとファリサイ派の人々が近寄って来て、「夫が妻を離縁することは許されているでしょうか」と、問いかけてきた。主イエスは、「モーセはあなたがたに何と命じたか」と、逆に問い返された。彼らは、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」と答えた。申命記 24 章 1 節に、「ある人が妻をめとり、夫になったものの、彼女に何か恥ずべきことを見だし、気に入らなくなったときは、彼女に離縁状を書いて渡し、家を去らせることができる」と規定されている。これがモーセの命じた律法とされ、彼らは、この律法から、モーセは離縁状を書いて離縁することを許していると答えた訳である。主イエスは、「あなたがたの心がかたくななので、モーセはこのような戒めを書いたのだ」と言われた。申命記 24 : 1 は、夫に都合よく定めた戒めであるが、「何か恥ずべきことを見だし」という文言の「恥ずべきこと」とは何かについて、議論が交わされていた。ある学派は「恥ずべきこと」を「姦淫」のみと厳格に理解し、安易な離縁をいさめていた。ところが、ある学派は「恥ずべきこと」を「道で他の男と話すこと」、「料理が下手なこと」、更に「妻より美人がいること」なども「妻の恥ずべきこと」とし、離縁できる解釈へと無限に広げていった。夫にとって、厳格な解釈より、都合のいい解釈の方が受け入れ易い。当時、都合のいい解釈に流され、妻たちは安易に離縁され、彼女たちの生きる権利は極めて希薄なものであった。ファリサイ派の人々は、「愛」を説く主イエスは離縁について、どのような考えを表すかを試してみたのである。

主イエスは、「恥ずべきこと」に関する議論はせず、人間創造の原初から説き起こしておられる。「天地創造の初めから、神は人を男と女とお造りになった。こういうわけで、人は父母を離れて妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、もはや二人ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」神は人を男と女に創造された。人は父母から自立し、妻と結婚する。二人はもはや一体である。一体とは、全てが一つになったという意味ではなく、対となったということであろう。対となるように結び合わせたのは神であるから、人はこれを離してならない。妻たちが安易に離縁されていた時、この創造物語による戒めは女性を尊重する主イエスの言葉を表している。

しかし、主イエスの結婚観、離婚観は、現在の視点から見ると正当性はないと言わざるを得ないこともある。今日、男と女だけでなく、LGBTQ (性的少数者) の人権が認知され、結婚の形も多様になっている。ただ、結婚したら、誠意をもって、互いの責任を果たすように全力を尽くし、愛を育てる労苦を惜しんではならないことは言うまでもない。しかし、一度結婚したら死ぬまで守り抜けということではない。離婚することによって、生きる場を得られるという事実もあるからである。また、主イエスは続いて、妻を離縁して他の女と結婚する者、夫を離縁して他の男と結婚する者は「姦淫の罪を犯すことになる」と言われるが、この言葉には正当性はない。